

ISSN 2186 – 3989

十返舎一九著『越中楯山幽霊邑讐討』の研究（その1）

福江 充

A study of *Etchū Tateyama Yūrei-mura Adauchi* by Jippensha Ikku
(Part1)

Mitsuru Fukue

北 陸 大 学 紀 要
第49号(2020年9月)抜刷

十返舎一九著『越中楯山幽霊邑讐討』の研究 (その 1)

福江 充*

A study of *Etchū Tateyama Yūrei-mura Adauchi* by Jippensha Ikku
(Part1)

Mitsuru Fukue*

Received April 24, 2020

Abstract

Tateyama in Etchū province was well known by Heian-era Japanese people as a sacred mountain that contained an actual hell. It was believed that all Japanese who committed sins during their lifetimes would fall into Tateyama's hell, and that Tateyama was a sacred site where the living could meet the dead.

Among the many works published during the second half of the Edo period by the popular and prolific playwright and novelist Jippensha Ikku (1765~1831) are two that took up the theme of Etchū's Tateyama. Ikku published *Etchū Tateyama Yūrei-mura Adauchi* in 1808 and "Etchū Tateyama sankei kikō" in the eighteenth volume of *Shokoku dōchū kane no waraji* in 1828.

The latter work has been transcribed and annotated by a number of scholars, and some have studied it in the context of Tateyama belief; to some extent it has been introduced to the academic world. The former work, however, has not received the same attention in terms of transcription--it has only been quoted by a few scholars--and there has been no introduction or analysis of the work as a whole.

It is thought that Ikku travelled to Echigo, Etchū, and Kaga in 1826, and that he based *Shokoku dōchū kane no waraji* (1828) on that experience. Like one of his most famous works, *Tōkai dōchū hizakurige*, it is comedic. By contrast, *Etchū Tateyama Yūrei-mura Adauchi* of 1808, published twenty years earlier, was composed with then-popular revenge novels in mind, as Ikku himself indicated at the beginning of the volume. In Ikku's novel, a young couple falls in love, the woman gets pregnant out of wedlock, they elope, the man is murdered by a middle-aged male stalker, and the victim appears as a ghost to the woman he loves. Ikku further incorporated an old story about Tateyama's ghost town. He thereby combined various motifs and genres to create this popular and entertaining novel.

Ikku's two Tateyama-related works can be classified into different genres, but both indicate a shift in perception of Tateyama from a sacred site of intense religious practice during the classical period to a mountain that welcomes tourism and offers entertainment during the Edo-period.

In 1814, six years after the publication of *Etchū Tateyama Yūrei-mura Adauchi*, while

*北陸大学国際コミュニケーション学部 Faculty of International Communication, Hokuriku University

under the rulership of Kaga domain's Maeda family, what had long been Tateyama's mountain-meditation route was circumvented. At the same time, the facilities at the Tateyama hot-springs (close to the mountain's caldera and the many mountain peaks in the area) were restored and a direct route was established from the mountains to the hot-springs. It was the start of a thriving hot-springs business. As a result of these developments, priests of the town Ashikuraji in Tateyama's foothills, who until then had hosted pilgrims who climbed the mountain as religious practice, had to adjust to an increase in secular tourists and pleasure hikers. The sudden decrease in pilgrims put Ashikuraji priests into a very difficult practical and economic position. They had to rethink their doctrinal teachings and customs, such as appealing to women who had been excluded from the sacred mountain. Kaga domain's strategies for stimulating the local economy during the latter half of the Edo period threatened the older economy of Tateyama as a sacred site.

Etchū Tateyama Yūrei-mura Adauchi reveals that Ikku witnessed these socio-economic changes and that he was aware of—and poked fun at—Tateyama's traditional sacred character. We also sense from this work that Ikku was prescient about the mountain's future.

In this article I first transcribe and introduce *Etchū Tateyama Yūrei-mura Adauchi*. Then I analyze its contents and contribute to a deeper understanding of this work as a historical source important to research of Tateyama's religious history.

Key word : 『Etchu Tateyama Yureimura Adauchi』, Jippensha Ikku, Etchū's Tateyama, Tateyama Beliefs

はじめに

越中国の立山は、平安時代には既に山中に地獄が実在する霊場として、日本人の間でよく知られていた。生前に罪を犯した日本人は皆、立山地獄に堕ちると信じられ、したがって翻れば、立山は生者が死者に会える霊場としても、日本人の間でよく知られていた。

さて、江戸時代後期の人気作家（脚本家・小説家）十返舎一九（1765～1831）の膨大な著作の中で、この越中国立山を題材としたものに、文化5年（1808）刊行の『越中楯山幽霊邑讐討』と文政11年（1828）刊行の『諸国道中金草鞋』第18編（内題「越中立山参詣記行 方言修行金草鞋」）の2冊がある。

このうち後書は、これまで数人の研究者によって翻刻や解説及び立山信仰史研究における史料的位置づけが行われており、ある程度世に紹介されている。ところが前書については、数人の研究者による若干の言及はあるものの、基本となる翻刻書・翻訳書が全く見られない。もちろん史料分析も皆無である。

ところで一句は、文政9年（1826）、実際に越後、越中、加賀方面を旅したと推測されているが、『諸国道中金草鞋』（文政11年）はその体験に基づいており、彼の代表作『東海道中膝栗毛』と同じく滑稽本の種類であった。一方、『越中楯山幽霊邑讐討』は合巻で、『諸国道中金草鞋』の刊行より20年前の文化5年（1808）に刊行されており、その内容は一九自身が巻頭に記すように、当時江戸で流行していた仇討ち小説を強く意識したうえで、その中に若い男女の恋愛、婚前妊娠、駆け落ち、中年男性によるストーカー殺人、死者の幽魂と怪異譚、さらには一九が友人の唐来参和から教えてもらった（唐来参和は古老から聞いたという）立山幽霊村の話等々、幾つかのモチーフを織り交ぜて書き上げた大衆娯楽小説といったものであった。

この2冊のジャンルは異なるが、どちらの内容を見ても、古来の霊場立山に対する人々の意識が、文化・文政期には信仰一辺倒の修行の山から観光・遊樂の山へと移り変わっていったことを窺わせてくれる。

折しも『越中楯山幽霊邑讐討』が刊行された6年後の文化11年(1814)には、加賀藩前田家の支配のもと、従来の立山禅定道からは外れるが、立山の台地や峰々と近接するカルデラ内に立山温泉の施設が整備され、また併せて山麓から立山温泉への直通路も敷設され、本格的な温泉経営が開始された。その結果、芦峯寺衆徒は、参詣者が古来の禅定登山(修行登山)よりも観光・遊樂登山を求める社会風潮を反映してか、芦峯寺を訪れる参詣者の激減や、霊場内における女人禁制領域の再検討など、旧来の立山信仰の教義や慣習を揺るがしかねない極めて困難な状況に陥った。また経済的な面でも著しく困窮した。いわば、江戸時代後期の加賀藩の産業振興政策が旧来の霊場信仰を脅かすような事態を招いた。『越中楯山幽霊邑讐討』は、一九がこうした社会の風潮を早々察知し、それを敢えて古来の伝統的な霊場立山を題材として創作しているところに大きな意義があり、また一九の流行作家としての先見性が感じられる。

さて今回、本稿においては、小説といえども江戸時代の文化情報を多分に含み、史料価値が極めて高い『越中楯山幽霊邑讐討』をまずは翻刻・意識し、世の中に紹介したい。なお、本格的な内容分析や立山信仰史研究の分野における同書の史料的位置づけについては、論文の分量が多くなるため、稿を改めたい。

1. 十返舎一九著『越中楯山幽霊邑讐討』

『越中楯山幽霊邑讐討』は、十返舎一九著、一柳斎豊広(歌川豊広)画。出版社は鶴屋喜右衛門。出版年は文化5年(1808)。装丁は和装、全6巻、2冊(合巻1冊)30丁。注記として広告・蔵版目録・近刊予告などがある。

同書は、国立国会図書館古典席資料室(請求記号:209-15)や東京大学大学院人文社会系研究科・文学部図書室(収蔵番号:国文・近世:36.14:1034801833999)、専修大学図書館(全6巻のうち存3巻)、富山県立図書館(請求記号:T935-14)、静岡市立図書館(請求記号:K131)、東京都立中央図書館(2次資料・マイクロフィルムリール1巻、請求記号:加ボジ1946)などで所蔵されている。なお、本稿で翻刻及び分析に用いた『越中楯山 幽霊邑讐討 一九作』は、富山県立図書館所蔵の作品である。収蔵番号はT935-14、寸法は17.8cm×13.0cmである。

以下は、同書の翻刻である。

【表紙表】

越中楯山幽霊邑讐討 一九作

【表紙裏】

読本 善知鳥安方忠義伝後編 蜘蛛のふるまひ 全部七冊 山東京伝作 歌川豊国画

醒醒齊山東翁著 骨董集 近刊

二百年以後、聞人の伝并に肖像珍書奇画古制の衣服雑器のたぐひ 諸好ず家の秘篋にもとめ

数十部の珍書を引自己の考を加へ事を記し物を図たる漫録尚古の書なり

文化戊辰新絵草子

ひがしかづきのいしみのこほり しらふぢけん だものがたり
東上総夷潜郡 白藤源太 談 山東京伝作 歌川豊国画 全部七冊

こそ の ろく や へがすみ あだうち
小曾野祿三郎 八重 霞 かしくの仇討 山東京伝作 歌川豊国画 全部六冊

おすぎ おたま ふたみ の あたうち
於杉 於玉 二身之仇討 山東京伝作 歌川豊国画 全部六冊 文化三丙寅年発行

けいせい まつ くわんぢよ さくら かたきうちふたごのわたし
契情の松 官女の桜 復讐子渡頭 山東京山作 歌川国貞画 全部六冊

【1丁表】

ゆうれいむらあだうち
越中楯山幽霊邑讐討 全部九冊 合本一冊

とうらい へいしつ いはく このごろりうかう きょうし けみ すべてふく
友人唐来三和子、予が弊室に來り、いへることあり曰、近頃流行の稗史を閲するに、凡而復

しう だん えんこんせきじゆ ぼうれい みやうげん しる きょうしごと
仇の談に限れり。そが中に、人の怨恨積聚、亡霊の冥影を録すこと冊子毎にして、あるは山

ぞく けうゆう あくらうふくじや さいがい
賊海賊の晝勇なる、あるは悪狼蝮蛇の災害にあへる。これらの趣、俱に附会せざるはなし。

よつ ところ きくはい いれ さくせつ
因て作者、意を奇怪の中に容て、もはら世界の鑿説

【1丁裏】

われじやくはん や わ えつちうのくにたて ゆうれいむら しぜん
を需む。我若冠の頃ほひ、古老の夜話にきけることあり。越中国楯山に幽霊村と、自然に

い みやう ゆうちう ほうえ きやうはつ ぼうれい すがた げん けいじん
異名を付たるあり。そは邑中の男女白衣を着し、髻髪にして、亡霊の容貌と頭じ、詣人の

めいどう せもつ わさぼ てだて まこと しやうだん われ しゆ
こころを迷倒させ、施物金錢を貪る手便とせしよし、寔に一箇の笑談なり。予是をもて趣

かう ぼうしつ やうや その かた あめ
向とせし一作ありしが、忘失して稍く其一二を思ひ出せりと、語り終わて、予にこれを編よ

おもへらく たて にちいきさいじやう れいじやう
といふ。予思為、立山は日域最上の霊場なれば、かかることの有べきやうなし。

【2丁表】

まつた きよたん せつ ろん けう そな
全く虚誕の説なるを論ずるに足らざといへども、一夕の興に備ふる稗史なればと、是に同

ながはま ていふ ふくしう げんわ つく ひやうだい
国長浜の貞婦が復仇の玄話をもて編り合せ、則此表題をかうふらしなし

文化戊辰春 東武逸民 十返舎一九題（花押等）

卷中除目

第一回 しきじやう はな
色情の花ざかり

第二回 ぼうあく
暴悪のおぼろ夜

第三回 遺恨いこんのはる雨さめ

第四回 恩愛おんあいの眞しんの宿やど

第五回 幽霊ゆうれいの雪ゆきの日

第六回 孝心かうしんの月あかり

【2丁裏】

①むかしむかし、えちごのくに、ながはまといふ所に、ほうじゅいんけんかいほういんといふものあり。もとは、えつちうたて山のしゆげんなりしが、いささかのさハリありて、たと山をしりぞき、此所にしるべをたのみて、さいしともにおうきよし、かぢきとうをなし、くらしける。つまは身まかり、むすめおみす、ことし十六才にぞなりける。きりやう人なみにこへ、心さまもやさしければ、みな心をかけぬはなかりける。そのころ、とうごくあかまつのしゆくに、しらふじ権藤太といふらう人のあり。すこしのきんすをたくわへ、そのりぶんととりて、ひとりあんらくにくらしけるが、

②こいつは、めうしゆをうたれたんぼの、ひいなぐさじや。

③よいきみよいきみ。

④おみすぼう、どうじやいの。

【3丁表】

①おりふしは、このほういんかたへ、あそびにきたり。ごなどうちて心やすくせしに、むすめ・おみすがきりやうになづみ、おりおりひとめのひまには、くどきけれども、おみすはけしてしたがはず。ごんどう太、いかにもして、このむすめを手にいれんと、ほういんがひんきうを見こみ、しんせつらしく、きんすなどようだつこと、たびたびなり。

②おととさん、おにばなができました。をすかんごんどう太さんへ、あげるのないわいな。

【3丁裏】

①しかるに、このほういんのかたに、おさなき時より、めしつかひたる、まきのすけといふわかしゆあり。おやは、このきんざいのいづみ村にすみ、わづかのひやくせうなり。まきのすけ、生れ付、あでやかにして、心だてもやさしく、すでにことし十七才なり。いつしか、むすめおみすとしのび合て、ついにおみす、ただならぬ身となりければ、ふたりとも大きに心をいためものうき。ほういん、このことをしらべ、ふたりが、ながきわかれとならんもはかられずと、そのことのみおもひくらしいたりける。ごんどう太は、このふたりが、こいなかとさとり、心中に大きにせきこみ、このうへは、おもてむきほういんにしよもうし、ぜひぜひもらひうけんとおもひ、まづそのことはいはず、ようだちたるきんすのさいそくを、せい

②わたくしは、いつそくろうでなりませぬ。

③どふぞ、よいしあんがありそふなものじゃ。

【4丁表】

①きうにせめたりける。ええ、けち。いまいましいやつらじや。今にてん上、みせてやろう。

【4丁裏】

①ごんどう太は、しきりに、かねのさいそくをなしけるにぞ、ほういんめいやくし、いろいろとことはりいふに、権藤太それにつけこみ、むすめおみすを、しようしかけらはんといふに、ほういんも、ことはりいば、かねのさいそくにあはわんと、ぬすつくぐりつ、いつすのがれに

②わん、わん、わん、おいらとおなじ、そでこくな、ちくしやうめ、わん、わん、わん。

【5丁表】

①いいのぼし、おきけると、おみす・まきのすけはこれをきき、心をいためすんは、いかにやなりぬらんとあんじ、わびつつことに、ただならぬ身なれば、もしも権藤太かたへ、よめいりさせんとあらば、いかにせん、とかくこの所においては、そはれじとおもひ、たがいにわかげのあとさきをもわきまへず、ついにいひあはせて、ふたりうちつれ、よはにまぎれて、かけおちしける。

②いつそ、むねがどきどきしてならんわいな。

③さぞだんなさまが、おほらだちであろう。おいとしい。

④そつちのむねより、おれがどきどきして、きがわるくなつた。おもいれほへてやろう。わん、わん、わん、おわんのわんとな。

【5丁裏】

①それよりふたりは、まきのすけがおやもと、いづみむらにぞいたりける。いづみむらの丁田しやうひころくといふは、まきのすけがおやなり。おみすをともし、かけおちしてきたるを大きにいきり、さまざまいけんし、おみすをば、おやもとへかへさんといふに、おみすなげきて、だんことたのみ、もしも、ふとくしんにて、ぜひぜひかへさんとのことならば、このよにいきがひなきいのちなりと、なみだながらにたのみける。

【6丁表】

①ごんと太は、あらかたほういんを、いひくるめたとおもふうち、おみす、まきのすけとうちつれて、かけおちしけるゆへ、ざんねんにおもひ、このうへは、ふたりがゆくえをせんさくし、ぜひともおみすを手にいれんと、さまざまにころをつくし、ひごろ心やすきわるものどもをたのみ、ないないせんぎして、もし兩人がありかをききいだしたるものには、いつかどのしやれいすべしと、けいやくしける。

②どふしても、おとこがたたぬ。ぬしたちをたのむたのむ。

③ひやくもがてん、二ひやくもせうちだ。そのかわり、さかやのかもなんばんをとりにやり、ハコブネだの

④その女をたづねだしたら、又おれとにげやうと、いふだろう。とかくおいら、女がほれるから、こまりはてる。

【6丁裏】

①ひこ六は、おみすが、だんだんのなげきをおもひやり、ついに兩人をかくまひ、ないない、ほういんかたへもかくとしらせけるに、ほういんもむすめのふびんさに、今とりもどさば、わかげのいつてつにて、いのちつづくにもおよぶことあらんがと、ひこ六へ、今しばし、せはしおきくれよとたのみ、ないない、その手あてをなし、あづけおきける。おみすは、ただならぬ身のすでに十月にみち、さんのけ

②うれしや、あんざんしたと見へる。

【7丁表】

①つきければ、ひころく、ほういんかたへも、ひそかにしらせけるゆへ、さすがに、おんあいの道のがれがたく、ほういん、よにいりて、ひころくかたへたづねきたりける時、はやおみすは、やすやすと、たまのよふなるおとこの子を、うみおとしける。

②やれやれ、よい子じゃ。まきの助に、そのままじゃ。

【7丁裏】

①たしかにそふだ。よしよし。

【8丁表】

①ほういんは、おみすがあんざんに、心おちつき、やがて、たちかへらんとするに、夜ふけたれば、道のほど、こころもとなしと、ひころく・まきのすけ二人して、ほういんをおくりける折ふし、むらさめふりいだし、くらははくらしゆふこく、たどり行。ごんとう太、ほかよりかへりがけ、やなせ川のほとりにて、あめにあひ、大木のかげにあまやどりしていたるが、ほういん、兩人のものにおくられかへるをみつけ、さきにて、てうちんもちたるものをみれば、まきのすけなりけるゆへ、ごんとう太、こらへず、きやうこそ、わがこいのあだ、にくきみにくしと、折しも、さけきげんにて、ひとこしを引ぬき、きりかけける。

【8丁裏】

①おもひもよらぬことなれば、何かはもつてたまるべき、まきのすけ、かたさきより、したたかにきりつけられ、あつといふて、やなせ川にうちたをれ、ながれてゆく外はなかりける。ほういんおどろき見れば、くせものは、ほうかふりに、めんていをかくしたれども、まさしく、しらふじごんとう太なりと見てとり、わが身のうへもあぶなしと、こへをたてて、人をよびさげびつつ、

にげいだしける。ひころくもあはてうろたへ、ただ、ひとごろしと、わめきちらし、あなたこなたへかけまはりけるところに、おりふし、四・五人づれにて、わうらいのもの来かかり、

②やれやれ、かなしや、かなしや。

【9丁表】

①何をやりんと、はしりよりたるに、見つけられじと、ごんとう太はそのまま、この人々をくぐりて、にげかへりける。

②おのれ小ぞうのくせに、大それたことを、しやアがった。おもひしつたか。しつたか。なむめうほうれんだぶつ。

【9丁裏】

①まきのすけは、おもひがけなく、きりころされ、ひこ六、あるにもあられず、くやめどもせんかたなく、あいてはにげければ、まづはほういんをながはまにおくりとどけ、ひとりとぼとぼかへりみちすがら、おもふやうは、まきのすけがさいご、あからさまにかたれば、さんふのちをあげて、むなしくならんこともしれがたし。立かへりては、まきのすけがさいごのことは、かくすにしかじとおもひさだめ、いかがいつわりいわんとて、そのくふうのみして、もとのやなせ川にいたり。

【10丁表】

①いたばしをわたりゆくに、ひころくが、あゆみゆく二・三げんさきに、火のたまころころと、ころがりてゆくに、おどろきたちとまり、見たるが、さては、わがしゆうしやうにつけこみ、きつね・たぬきの、われをたぶらかさんとするなるべし。心よはくては、かなふまじと、ひころく、わざとよはみを見せず、しづかにあゆみゆくに、かの火のたま、おなじみちを、さきにたちてころがりゆくぞ、あやしけれ。

【10丁裏】

①ひころくは、きつね・たぬきのわざならんと、心ゆるさず、たどりゆくに、やがて、わがやのかどさきにて、かの火の玉、彦六よりさきに家のうちへとびこみける。ひこ六、おどろき、いそぎうちに入たるに、母ぼう、ひころくを見て、さぞさぞおそかりし。まきのすけは今かへりたり。御身なにとてあとにのこりたもふやといふに、ひころく、いよいよいぶかしく、まきのすけかへりしとはこころはずと、あたりをみれば、おくのまに、おみすとはなしごへするゆへ、さては今のひのたまは、まきのすけが、しうねんなかりと、おもはず、なみだにかくれける。

②はやくあけたひもい。

【11丁表】

①ひころく、おくのまのやうすを、うかがひ見るに、まきのすけが、めんていかつこう、何となくあはれげに、おみすとはなしするこへもかなしく、なみだぐみたるふぜい、このよの人とはおもはれず、さてこそ、そのみは、ひごふにししたれば、うかみもやらず、あとにのこりし、つまこにしうちやくのねんをのこし、およひきたりしものなるべし。いかにしても、ふびんのありさま也と、こころのうち、ねんぶつをとなへ、おもはず両がんとすり、あかめ、ひとりなみだをとどめかねける。

②よふも、もどつて、くだんした。

③ずいぶんあとのようじやうを、だいじに、はやうたつしやになるがよい。そして、こぞうには、たへず、きうをすへて下され。とかく、それがこころにかかる。なにもしらずに、かはいや、かはいや。

【11丁裏】

①ひこ六は、あまりにたへかね、なみだながらに、まきのすけがそばへかけよると、そのまま、かたちはきへて、うせにける。おみす、おどろき、何とて、今までありつる、おつとのすがた、いつかたへゆかれしや。ふしぎなりと、うろろうする。ひこ六、今はつつみがたく、やなせ川にて、らうぜきものために、きりころされししだいかたりければ、おみすは、はへとばかりに、こへをあげてなきかなしみ、きやうきのごとく、あなたこなたへ身をなげふして、たへりける。ひころくが母ぼうも、かつてよりかけいで、これをききて、ともになしみにたへず。ことはりなるかな、このひこ六ふうふのなかに、二人のなんし

②このよふな、かなしいことはござらぬ。いつそ、しんだがましでござろう。とうりて、ゆふべの、ゆめがきにかかった。かはいや、その子は、ちちしらずじや。

【12丁表】

①ありけるが、あには彦十とて、せいちやうにしたがひ心たけく、さまさまのあくぎやうをなし、大さけをこのみ、けんくはとうろんをつねとし、はては、かけおちして、今ゆくえしれず、弟のまきのすけ、ほういんかたへ、ほうこうにつかはし、きにいりて、じつていにつとめけるゆへ、これをのみ、すへのたよりとして、うきかんなんの、すぎわひをなしくらしたるに、はからずも、ひごうのさいごとげ、まことに、ひころくふうふは、りやうの手をもきとられしこちして、こへのかぎりなきさけびけるにぞ。おみすは、このかなしみにたへかねて、かくごのていに見へけるを、ひころく、さまさまにいけんし、何とぞ、このうへ、まきのすけがついぜんには、おさなきものをもつ、そだて、せいじんさせ、ちちのかたきをうちとらせ、まきのすけがむねんの、もうしうを、はらさせんは、何よりまさりて、きゆうようならんと、なみだながしにいさめける。

②かへらぬことを、くよくよおもつて、びやうきがでてはならぬ。とかくそのごそうめをかたみとおもつて、はやうつれて、てらまいりでもするがよいのふ。

③もふなくな、なくな、いふおれが、やつぱりなみだが、どふもとまらぬ。

【12丁裏】

①さて又、しらふじごんとう太は、ふりたにして、まきのすけを、うちはたせしが、

【13丁表】

①そのとき、ほういん、わがめんていを見つけしよふすなれば、さだめしまきのすけを、きりころせしは、われ也とさとりたるなるべし。さあるときは、ごにちのさまたげ、このうへは、ほういんをもうつてすてんとおもひ、ことさら、まきのすけ、ふけうも、うけざるやうすは、ほういんなれあひにて、おみすをにがせしものなるべし。かたがたもつて、いこんやみがたければ、打はたしはらはんと、うかぶ所に、ほういんは、まいねん、えつちうたて山へさんけいすることなれば、すでに、このせつ、そのよういをなし、たて山へしゆつたつせしかば、ごんとう太、さいわいの時なりとて、きうにあとをしたひ、しゆつたつし、みちすがら、くもすけどもに、きんすをあたへ、かやうかやうのもの、たて山へさんけいしたり。そのもの、かへりをここにまちうけ、うちころしくれる。もしなんぢらの手にあまらば、そのときこそは、われかけむかひて、きりころし、けつしてなんぢらには、あやまちさせじとゆるる。

②とうぎのてつけ、ちよつとしたところが、このくらひのものだ。しゆびよく、しあふせたときは、ほうびはしつかり。なんにもやらぬが、きいてあきれる。いやこれはしやれだ、しやれだ。

【13丁裏】

①ほういん、まいねん、たて山へさんけいしけるが、ことしも、そのじせつなれば、しもべ二人めしつれ、さんけいしてかへりみち、いとひ川となみのあいだの山中にて、わるものども大ぜい、けんくはをしかけ、しもべどもをうちたたき、おつちらし、ほういんを

【14丁表】

①とらえて、わきみちへひつこみけると、ごんとう太あらはれ、いかにほういん、われこひのいしゆにて、まきのすけを打とりたるとき、そのほう、わがめんていを見付しゆへ、ごにちのさまたげ、ともに、このよのいとまらせんと、そのほうがあとをしたひ、このところに、まちうけたり。むすめおみすのありかを、はくじやうしてくたばれとぞ、ののしりける。ほういん、はらにすへかね、まことに、なんぢはごくあくにん也。われ、ありせるつみもなく、いこんうくるおぼへもなくして、このところにつけこまれしは、まことに、さいなんぜひもなし。ともしなんいのちならば、われ一人はしぬまじければ、なんぢをともに、めしつれんとて、ひきぬいてうつてかかるを、ごんとう太、こころへたりと、わたりあふ。わるものどもは、ぜんごさゆうより、ほういんをうちなやまし、ついに、ごんとう太、つけいりて、なんなくほういんを、きりころしける。

【14丁裏】

①さてもひころくは、まきのすけがわうしに、ちからをおとし、ひたんのあまり、しゆつけとんせいをもせんと、おもうほどなれど、人々のいさめに、これをとどまり、せめて、まきのすけがぼだいのため、かねて、しんかうしける、たて山へさんけいせんとして、おみすおや子は、女ぼうにまかせおき、ひとりたちいでてゆくほどに、いとひ川の山中にて、たそがれにおよび、わらじのひもきれたるとき、ちやみせとみへて、ひとつ家ありけるに、たちより、わらじをはきかへるに、としのころ十七ばかりのわかしゆ、ちやをくみて出たり。めんていかつこう、まきのすけによくにたりければ、ひころく、ふしぎにおもいみとれいたるに、おくより又、十あまりのほうし、あづきもちを、ぼんにのせてもち出、ひころくにすすめける。このほうし、げんかいほういんに、よくにたるゆへ、ひこ六、いよいよふしぎにおもひけるうち、二人のもの、おくへ入たるまま、いつこうに出来らず。ひこ六、ふいなげにここをたちいで、いそぎ、ふもとへおりたちける。

②やれやれ、ふもとへは、もふすこしじや。せいつけてまいろう。

【15丁表】

記載なし。

【15丁裏】

①かのちやみせのほうし、わかしゆとも、すぎさりし人々に、すこしもちがわず、よくにたりけるゆへ、あまりのことに、ふしぎにおもひみとれいたるうち、おくへ入てきたが、ひるげも、かたちも見せず、ひころくは、しばらくまでども、かないに人なきゆへ、せんかたなく、こころをのこし、この所をたちさりけるが、道すがらおもふに、たて山にさんけいするもの、すぎさりし人にあふことありとききたるが、さては、まきの助のゆうこんなるか。それにしても、ほういん、このよにあり、まきのすけとともにすがたをあらはせしは、がてんがゆかずと、ほういんのさいごをしらねば、ふしんにおもふもことはりなり。

【16丁表】

①これよりひこ六、たて山へさんけいし、まきのすけのあとをとひ、かへりみちに、またまた、いとひ川の山中にて、さきにたちよりたる、ちやみせをたづねけるに、いつこう見へず。すべてこのあたりには家なし。ひころく、ふしぎにおもひ、よくよくかんがへみるに、大木の松ある所と、たしかにおぼへて、それをたづぬるに、ひとつの松の大木あり。されども、家はなくて、かたはらに石をつみて、とうとなし、しきみのはなをさしたるあり。さと人にあひて、これをきくに、これはすぎしころ、六十ちかき、しゆげんじや、此所にて、何ものにか、きりころされたり。所のものども、いたはしくおもひて、此所にうづめ、しるしのつかを、いとなみしといふに、ひころく、その

【16丁裏】

①しゆげんじやの、めんてい、こつかくをきくに、げんかいほういんにちがひなければ、大きにおどろき、さてさてわれさきに、このところにて、たいめんせし兩人は、まさしく、ほういん、まきのすけの、ぼうこんなるべし。ほういん、ここにて、ころされたれども、まきのすけと、あうじのえんつきねど、まきのすけ、ほういんにしたがひおること、まのあたりに見たる、ふしぎさまと、ねんづつ、えかうして、それより、いそぎ、いづみむらにかへり、このことを、ものがたりければ、おみす、またまた、なみだにくれ、さてさて、おつとのわうし、かなしきうへ、ちち、ほういんも、ひごうにはたまひしとは、何でぞや。いかなる、ぜんせのむくひにや。おやにはなれ、おつとにわかれ、何たのしみに、いきがひなきいのちなれども、おさなきものあるゆへに、あまにも口（1字未詳）なれず、よくよくの

②たて山の、おありがたい御里しゆうで、まきのすけは、うかんだて、あろうぞいの。

③なまなり、ふたりのしうに、あふてきた

【17丁表】

①いんぐはの身やと、なけさけび、ふし、しづみいたるが、しばらくありて、ひころくに、むかひたるにても、ふしぎなることあり。御身、この所をたち給ひしあくる日は、まきのすけのめいにちなるゆへ、あづきもちなど、こしらへ、きんりんの人びとにくようし、ほとけにそなへたるが、御身も又、その人びとより、あづきもちをすすめられしとは、いかなることやらん。ふしぎなりといふに、ひこ六、なみだをはらはらとながし、それにて、おもひあたりたり。われ、ここをたちて、そのまきのすけ、ほういんにあひたるあくる日のことなり。さては、中ごにて、くふうしたりし、御身のこころざしとどきたるものなるべし。おみす、いよいよたまりかねて、なきしづみ、このうへは、われもたて山へさんけいし、せめて、その人びとのおもかげなりとも、ひとめ見たしと、こへもおしまず、なげきけることほりとこそ、きこへけれ。

②ので、なをかなしい。あわぬほうがましでござろう。

③おまへさんは、おうらやましい。どふぞ、わたしも、たて山へ、まいりたくござります。

④ほんに、この子がなくは、わたしもはやうしんで、ととさんや、まきのすけどののいる所へ、いつていつしよにいよふものを。それさへならぬといふは、いんぐはじやわいな。

【17丁裏】

①ここに、せんねん、ちちひころくに見かぎられ、家出したりし、せがれひこ十は、ますますあきぎやうつり、くにをへんれきし、このごろは、かりに六ぶのすがたとなり、ほつこくのかいどうを、わうくはいし、里にじんをたらし、きんせんをうばひとらんとする、ごまのはいといふものになり、えつちうたて山へさんけいする、どうしやを見るより、たちまちはなしなどしかけて、みちづれとなり、おのおのがたは、さだめし、すぎさりし人びとのぼだいのために、さんけいせらるるとおぼへたり。たて山のふしぎには、しんじしだいにて、お山のうち、

ししたるおやにも子にも、めぐりあふこと、ありがたき御里ゆへなり。そこもとがたは、何人のためにさんけいし給ふやと、だんだんと

②一百三十六ぢごく、のこらず、このお山にござる。げに、ありがたいところじや。そして、ちのいけ、もろはくといふ、よいさけがある。われらへかいて、おふるまいなされ。何もくどくじや。

【18丁表】

①とひかけ、おやのためといへば、そのおやのとしはい、かつこう、ものによせ、ことにかこつけてききすまし、あるひは、ひとつ子をうしなひ、かなしみにたへかね、せめて、ざいしやう、せうめつのためなりといへば、又その子の、としごろなり、かたちをとひおとし、さあらば、しんじんけんこにして、さんけいあるべし、そのくとくにて、おのおのがたが、心ざしのもうじや、たちまち、ごくらくじやうぶつするしるしに、たて山のぢごくだにといふところにて、まのあたり、そのもうじやにあひたまはん。これすなはち、ぢごくのかしやくをのがれて、ごくらくへじやうぶつするしるしなりと、かたりきかせて、うちつれだちける。

【18丁裏】

①おなじ、ごまのはいのなかまに、ぢそうの石へもんといふもの、ほうしとなりて、あさのころもちやくし、たて山の山中に、おのれが名の、ぢそうだうこんりうとの、ふりをたてたる。すこしのかやふきのうちに、かねうちならして、さんけいのものに、きしんをこひける。かねて、しめし合おきたることゆへ、六ぶひ二十は、どうしやどもを、この所につれきたり。石へもんほうしに、ひきあはせ、心さしの、かいみやう、ぞくめうを、きやうほんにしるさせ、さんもつをおさめさせ、そのうへ、どうしやともを、さきへやりて、ひそかに、かの石へもんにささやき、今のどうしやが、心ざしのほどけは、としごろはいくつぐらひにて、かつこうは、かやうと、さきにききすましおきたるとふりをはなし、あのものともが、けかうのとき、そのとしはいに、によりたる、ゆうれいをこしらへ、だし給へとて、しめしあひける。

②ぞくめうは、

【19丁表】

①条良美左衛門をたのみのみます。

【19丁裏】

①このあたりに、おなじ、わるものなかま、よりあひ、じぶんの、さいし、おや、兄弟、のこらずゆうれいにこしらへ、ぢぞう石へもん、なんどか、ちうもんを申きたると、たちまち、そのちうもんに、によりたるものを、えらひて、しろしやうぞくに、かみをみだし、ゆうれいとなして、そのとうしやども、げかうをまちうけ、ぢごくだにの木かげ、いはかげなどより、ちらちらと、そのていを見せかけ、どうしやどもの心を、まどふわせ、石へもんほうし、そのところへ

②きのふの、ほうそう子のゆうれいに、あかいきものきろには、こまつた。

【20丁表】

①つけこみ、ほうじをすすめ、きしんをすすめ、そのこんにやくのだましをうけて、きんせんをむさぼり、みなみな、はいぶんする。このものどもが、すみけるむらとて、たれいふとなく、ゆうれいむらと、いめうしけるとなり。

②アイ、四もん、いちごう。

【20丁裏】

①さても、しらふじ権藤太は、ほういんを、うちはたしてより、なにとやら、そこきこえわらく、あかまつのしゆくを、しゆつほんし、それより、しよしよをへんれきし、たくわへしきんすも、つかひはたし、さまさまの、わるだくみをなし、このほどは、身のおきところなく、すこしのしるべをたよりに、たて山の、ゆうれいむらにきたり。ぢそうの石へもんほうしの、ところに、せわとなり、ぶらぶらと、あそびくらしける。

②きさまも、これから、おれがでしになつて、ちと、ゆうれいに出て見さつしやい。あそんでいては、つまらぬぞや。

③どうぞ、このへんに、おとこめかけのくちは、あるまいかの。

【21丁表】

①石へもんほうしが、ちうもんにあひたるもの、すぐに、ゆうれいとなり、ぢごく谷、さいのかはら、つるぎの山などの、いわかげより、そのどうしやどもの、めにかかるように、すがたを見するゆへ、どうしやども、あはれをもよほし、石へもんに、えかうりやうなどを、かすめとられける。

②あれあれ、がむすめが出た。どうやら、しんでからふとつたやうしやわいの。

【21丁裏】

①さて又、おみすは、ひころくがちち、ほういんと、まきのすけに、あひたるはなしをききしより、しきりに、なつかしく、何とぞ、われも、たて山へさんけいし、なきひとびとの、かほひとめなりとも、見まほしく、もつとも、女は、とうざんおぼつかなしといへども、ふぢはしといへるあたりまでは、ゆかるるよし、さあらば、たて山へ、おもむかんといふ。ひこ六ふうふ、これをとどめ、わかき女中の、ことさら、おさなきものをつれて、ひとりたびは、心づかひなり。よきみちづれをまちて、行給へといふに、おみすは、

②おみすぼう、あばヤア

③すいぶんまめで、ころんだら、おきてござれ。いぬのくそをふんだなら、えんりよなしに、ふかつしやれ。

【22丁表】

①ききいれず。ぜひぜひ、一日もはやくさんけいして、おや、おつとに、あはんと、しきりに、そのしたくをなしけるゆへ、せんかたなく、とめてもとまらねば、ひこ六、そのころねを、おもひやり、女ひとりはやられずと、またまた、ひこ六、つきしたがひ、一子をつれて、はやいたつしける。きんりんのひとびと、むらざかいまで、おみすを見おくり、いづれも、なみだをながして、わかれける。

②どなたも、おたつしやで。やがて、めでたく、おめにかかりませう。おさらば、おさらば。

③かかひとりのこしてゆくが、きにかかる。なんまいだ、なんまいだ。

【22丁裏】

①おみす、ひころく、その日は、いとひ川のしゆくにとまりたるに、夜ふけて、兩人のゆめのうちに、石をつみかさねたる、とうのごときもの、まくらもとにあらわれたるが、たちまち、この石のとうのうしろより、人のこへして申けるは、われ、げんかいほういん也。たて山のかへるさ、この山なかにて、しらふじ権藤太がために、うちはたされ、ところのものども、わがしがいを、うづめ、しるしに、石をつみて、とうのかたちをいとなみたり。さきだつて、ひころく、さんけいのせつ、さいわいと、まきのすけに、いひあわせ、ひころくが、わしをとどめて、たいめんせしも、われ今、よになきことを、しらせんがためなり。このたび、おみす、このちにきたること、さいわいのことあり。われわれがかたき、しらふじごんとう太、このほどより、たて山にきたり。ゆうれいむらといふところにあり。

②ア一、よいさけだ。もふひとつ、かさねませう。ア一、ウ一、ムニヤ、ムニヤ、ムニヤ。

【23丁表】

①何とぞして、なんぢらがかたきをうち、われらが、むねんの、もうしうを、はらさせてくれよと、いふかとおもへば、そのことのみ、みみにのこりて、ゆめは、あへなくさめたりける。

【23丁裏】

①ひころく、おみすは、ふしぎの、ゆめのつげに、さては、ほういんの、うたれたもふも、ごんとう太がわざなるや、今、たて山の、ゆうれいむらといふに、しのびいることこそ、さいわいなり。何とぞ、手だてをもつて、うちとらんと、いそぎたどり行みちすがら、ふな見といふところの、山中にて、ひころく、ちやみせに、わすれものしたりとて、道のほど、一二てうも行ずぎて、おもひいだし、ひこ六、いそぎ、とりにもどりしあとにて、おみす、おさなきものに、ちをのませ、まちあはせいたる所に、六部一人とふりかかり、おみすの、ひとりいたるを見て、ぜんごに人もなし。はなしなどをしかけ、そばにたちよると見へけるが、くびにかけたる、さいふのひもをみつけ、ろようを、うばひとらんとて、

②イヤ、こいつ、まんざらでもない。しかし、がきめをつれてけつかるからは、

【24丁表】

①手ごめにするを、おみすは、かなしく、さまざまにわびけれども、せうちせず、むたいに、ろようきん、せうせうを、うばひとりける。

②ていしゆめと、みちゆきだな。いやらしいやつらだ。

③ろようも、わたしは、もちませぬ。そこ、はなして下さりませ。

【24丁裏】

①かかるところへ、ひころく、はせもどり、らうぜきものめと、ひきのけんとしたるとき、六部きたるかさのひも、とけておちたるにぞ、たがひに見合すかほは、とし

②イヤ、もふ、あやまりいりました。こんなに、へこんだことは、いつしやうに、おぼへません。

【25丁表】

①をとつても、見わすれがたき、おやこのえん。せんねん、家出したりし、ひころくのせがれ、ひこ十なり。ろくぶ、ちにふして、あやまり入たるていに、ひころくは、なみだながら、そのほう、わがかたをしゆつほんせしより、今において、あくとうやまず。かたちにも、にあはざる、このていは、ぢうぢうの、ふとどき、いたしかたあるやつなれども、此たびは、たすけとらすべし。そのかはり、たて山までめしつれゆくべしとて、さまざまいけんし、さいわい、かたきごんとう太を、うちとらんと、心はやたけに、おもへども、わかき女に、あしでまとひの、おさな子といひ、われは、らうじん也。けつきの、ごんとう太に出合たりとも、もし、かへりうちにならんは、このうへのざんねんなり。せがれ、ひこ十に、めぐり合たるこそ、さいわい。今のつみをゆるし、めしつれて、まさかのときの、ちからとなさんと、だんだんのいりわけ、かたきうちのしだい、ものがたりければ、ひこ十、ききて、それこそは、たやすきことなり。

②おのれは、おのれは、エエ、どふしてくりやう。はらのたつ、ふこうな、やつほど、ふびんで、なみだがこぼれるが、くやしいわい。

【25丁裏】

①われ、ゆうれいむらを、せんさくし、おのおのに、うたせ申べしとて、ごんとう太の、としごろ、めんてい、かつこう、くわしくききとどけ、やがて、たて山にいたり、かの石へもんほうしに、かやうかやうの、ちうもんに、よくによりたる、ゆうれいを出し給へと、ごんとう太が、めんてい、としごろを、そのままにはなし、このゆうれい、しゆびよく、しあふせたらんときは、いつかどのかねもふけとなるべし。せしゆは、いたりて大きんを、しよぢせし、やうす也。ずいぶん、よく、ちうもんにあふものを、せんぎしていだし給へと、やくそくし、ひこ十、ひこ六、おみすに、おいつき、もはや、ほんもう、とげ給はん。げかうのとき、ちごくだにに、心をつけ給へとて、やがて、ちごくだににいたり、かならず、かへりには、こなたのいわかけより、そのかたき、あらわれ出べしと、かたりける。

【26丁表】

①石へもんほうしは、六部が、ちうもんに、なんでも、かねもうけせんと、ゆうれいどもの、あつまりるところへ、かけきたり、としのころ三十二三のおとと、やせがたちで、まなこ大きく、ほうぼねの出た、ゆうれいがいりようなり。きさまが、どふやら、にたやうなれども、はな、ひしやげで、ぢごくで、かさをかきましたとも、いはれまい。あちらの男、ほうぼねの、出たところはよいが、みみのきはに、たんこぶが、ぶらさがっているから、はじまらぬ。はて、だれがよかつ、かれがよかつと、いろいろ、せんぎすれども、いつこう、によりたるものなし。石へもん、しばらくかんがへ、いや、あるぞあるぞ、われらのところの、いそうろうが、この、ちうもんに、ちつともちがはぬ。これは、きめうと、やがて、ごんどう太をたのみ、ゆうれいに、こしらへける。

【26丁裏】

①ごんどう太は、おのれが、めんてい、かつこう、そのままに、ちうもんせられ、それとも心つかず、せはになる石へもんがさしづに、せんかたなく、しろきひとへものをちやくし、ぢごくだににいたり。六部のあいづをまちいたるに、六ぶは、やがて、人びとをとまなひ、げこうして、ぢごくだにへきたりたり。それと、あいづをなしけるに、ごんどう太は、おみす、かさをかふりいるゆへ、心つかず、むかふの岩かけより、あらはれ出たるところを、ひこ十、はやくも、うしろへまはり、ごんどう太のくびすじつかんで、おのおのがたのかたきといふは、これなるかといふに、おみす、ひとめ見て、いかにも、そのものこそ、しらふじごんどう太なり。ちちのかたき、おつとのあだ、おもひしれやと、ふところによい、たんどうをぬきはなしで、かけむかひける。

【27丁表】

①こいつは、とんだめにあはせる。ほんとうの、ゆうれいだと、きへてもふところだが、しろうとのゆうれいだけ、なんにもならねへだろう。

【27丁裏】

①このとき、ひこ十は、ごんどう太を、ひつつかんで、なげおとし、かたきをうたせんと、かせいしけるところに、おなじ、ゆうれいむらの、なかまのもの、ここかしこにいて、このていを見るより、そりや、けんくはよ、ゆうれいなかまにひけをとるなど、おひおひはせあつまり、ひとびとを、おいとりまき、ごんどう太にちからをあはせけるゆへ、ひこ十、いかつて、しやくじやう、おつとり、たせいのなかをかけまはり、たたきたつれは、ゆうれいども、さんざんにうちたをれ、なかにも、きづをかうむるもあり。ついに、かなわず、みな、ばらばらと、にげうせける。

②ヲヤ、ヲヤ、ろくぶさん、そこをはなしてくんねへさりとは、わりい、しやれだぞ。

③どつこい、しめた。イヤ、しめられた。

【28丁表】

①おのれら、一人ものこさず、うちころして、ほんとうの、ゆうれいにしてやろう。どつこい、そふはいかぬ。やすやすするな。ほんまのゆうれいとちがつて、大めしをくうおとこだ。それも、三どづつさかなをつけて、たいへいらくじやあねへ。うそなら、おらが、うちへきて見ろ。おれはさきへいく。

②あいた、あいた。

【28丁裏】

①おやぶん、じうわつと、たのみます。アー、いたい、いたい。おいらが、こんなにきられ、かかしゆが見たら、さぞ、なけるであろう。それがふびんだ。それより、おれは、もふ、たすかるまい。おれがしぬぶんは、いとほぬが、かかあを、ごけにするが、かはへそふだ。あれも、じきに、

②うれしや、しとめたそうな。よいきみ、よいきみ。

【29丁表】

①外のでいしゆを、もつよふに、心だくあんじはせぬが、大かた、ごけをたてるだろふとおもへば、それが、ふびんだ。かアイ、かアイ。ごんとう太は、おもひかけなく、おみすに出あひ、まことの、まるごしにて、はものはなし、ぬけつ、くぐりつ、にげまはるうち、ひこ十、ゆうれいどもを、おつちらし、かけよつて、ごんとう太を、しやくじやうにて、たたきふせけるとき、おみすは、とびかかりて、女ながらも、おや、おつとをおもふいちねんりき、岩をもたをす。きつさきするどく、つきとをされ、ごんとう太は、七てん八とうもだへ、くるしみ、ししたりける。

②おもひしつたか、おもひしつたか。

【29丁裏】

①所のもくだいより、いさい御ただしのうへ、おみす、ひこ六に、御ほうびを下されける。まさに、おみすが、かうしんていせつ、てんとうもあはれみ給ひけん。又、たて山の御りやくにや、さしもに、手ごはき、ごんとう太を、おもひのままにうちとり、ほんもうを、たつしける。又、ひころくことせがれ、まきのすけがしゆじんなればと、まづしき中にて、これまでのきどくなりと、御ほうびの、御ことばをかうむり、めんぼくをほどこしける。此とき、ゆうれいむらのわるもの、左もみなみな、おひはらはれける。まことに、たて山は、日本一箇の霊場なれば、てんじゆふしぎの、れいおうもあるべきなれども、ししたるもの、この御山にあるべきやうなし。されど、ほういん、まきのすけが、ひこ六に、あひたるは、これこそ、まさしく、まさしく、そのぼうれいの、あらはれたるにて、

【30丁表】

①たがひに、いかんのぶゆうをおこし、しぜんと、そのきの、ここにがううんして、そのふしぎをなしたるなるべし。

②さて、さて、女にまれなるはたらきのよし、ういやつ、ういやつ。

③そのくせ、めんかも、よいできでこさる。エヘン、エヘン。

【30丁裏】

①おみすは、こけうへ、たちかへり、御ほうびのきんすをもつて、でんはたを、かいもとめ、一子まき三郎を、かたくとして、ひこ十と、ひこ六を、こうけんとし、あんらくにくらはける。こうしんのとく、めでたし、めでたし。千穉万歳、大々叶。

②これから、ぼうは、おとなしくせねばならぬぞや。

③おめでたうござります。

④たてやまれいけんき楯山靈験記 全一冊

これも、御里しゆうのかたきうちなり。近日出来

⑤文化丁卯 正月編

同 戊辰 初春出

十返舎一九戯者

茂木氏

明治十七歳 十月求之

飯塚氏

2. 『越中楯山幽霊邑讐討』の登場人物

『越中楯山幽霊邑讐討』の内容を意識するにあたって、以下、登場人物を挙げておきたい。

- ほうじゅいんげんかいほういん（現在は越後国長浜に在住。もとは越中立山の修験者、年齢は60歳近く）。「ほうじゅいんげんかいほういん」→以下「宝珠院げんかい法印」。
- 宝珠院げんかいの妻（既に死去）。
- おみす（げんかいの娘、16歳）。
- しらふじ権藤太（浪人者。東国赤松の宿に在住、年齢は32歳～33歳ぐらい）。
- まきのすけ（げんかいの家の奉公人。和泉村の百姓・彦六の次男）。
- ひこ六（和泉村の百姓。長男に彦十、二男にまきのすけがいる）。「ひこ六」→以下「彦六」。
- 彦六の妻（彦十〔長男〕、まきのすけ〔次男〕）。
- 彦六の母。
- まき三郎（おみす・彦六の息子）。
- ひこ十（家出している。悪行を重ねながら越後国を遍歴し、現在は仮に六部の姿になり北国

街道を往還している。最近は立山界限で活動している)。「ひこ十」→以下「彦十」。

- げんかい法印の下部2人(げんかいの立山参詣に同行)。
- 悪者ども(しらふじ権藤太に雇われる)。
- 糸魚川山中の里人(殺されたまきのすけを懇ろに葬り、石積み塔を立てる)。
- 糸魚川山中の茶店の若衆(まきのすけの生霊〔生成り〕)。
- 糸魚川山中の茶店の法師(げんかい法印の生霊〔生成り〕)。
- ちぞうの石へもん(もともとは、ごまのはい〔旅の道中、旅人をよそおい他人の物をかすめとる盗人〕。法師の格好をして、立山山中に茅葺き家を設け、地藏堂建立を建前に勧進活動を行う。自宅の近くには幽霊村が存在する)。「ちぞうの石へもん」→以下「地藏の石衛門」。
- 幽霊村の人々(悪者仲間が寄り合って住む。自分の妻子・親・兄弟などを残らず幽霊に変装させ、参詣人を欺して生計を立てている村の人々)。
- 越後国長浜の目代。

3. 『越中楯山幽霊邑讐討』の内容(意識)

※第1回から第6回の各回における細目の表題は筆者が付けたものである。

【第1回：色情の花ざかり(2丁裏6丁表まで)】

(1) おみすに執着する権藤太

かつて越中国立山の修験者・宝珠院げんかい法印は、多少の問題から立山を離れ、知人を頼って、妻子と越後国長浜に移住した。妻は既に亡くなっていたが、娘のおみすは16才になっていた。おみすは器量が良く心も優しくだったので、彼女を好きにならないものはいなかった。

さて、東国赤松宿にしらふじ権藤太と称する浪人者がいた。彼は独身で、多少の金を蓄えており、それを元手に人に金を貸して利益を得、安楽に暮らしていた。

権藤太とげんかいは親しい間柄で、時折権藤太がげんかい宅へ基などを打ちにきていた。そのうち権藤太はおみすを好きになり、人目を忍んでおみすを口説くが、おみすは権藤太を全く相手にしなかった。しかし権藤太は何とでもおみすを手に入れたいと強く執着した。そこで、げんかいが貧窮していることを利用し、権藤太はあたかも親切な振りをして度々げんかいにお金を貸し付けた。

(2) 愛し合うおみすとまきのすけ

げんかいの家では、まきのすけという若衆が幼少の頃から奉公人として働いていた。彼は今年で17才であった。彼の親は近在の和泉村の百姓であった。まきのすけは生まれつき艶やかで心も優しくなった。いつの間にか、おみすとまきのすけの二人は互いに惹かれ愛し合うようになった。忍び逢っているうちにおみすが妊娠し、二人は困惑する。げんかいはこれに気づき、二人の今後を心配しながら暮らすことになる。

(3) おみすへの執着が深まる権藤太

権藤太もおみすとまきのすけの恋愛関係に気づき、複雑な思いを心にしまいながら、それでも、おみすを絶対に手に入れようと策略を練った。表向きはげんかいにおみすを所望するが、その実、おみすを借金の形としてげんかいに差し出させようとする策略であった。権藤太はげんかいに対して性急に借金の返済を催促するようになり、げんかいは困惑した。権藤太はげんかいの借金につけ込み相変わらずおみすを所望するが、げんかいはそれを断った。そのうちげんかいは、権藤太の借金返済の催促に合わないようにはしく潜り抜けながら、その場

凌ぎで返答を引き延ばした。

(4) おみすとまきのすけの駆け落ち

おみすとまきのすけは、権藤太の企みを聞いて心を痛めた。二人は行く末を心配した。もし、妊娠しているおみすの権藤太への嫁入りが決まれば万事休すである。二人は話し合い、とにかくこのままここに居ては一緒に居続けられないと思い、また、お互いが若かったこともあり、後先を考えず夜に紛れて駆け落ちしてしまった。二人はまきのすけの実家がある和泉村に向かった。

和泉村の彦六はまきのすけの父である。息子が奉公先の主人の娘・おみすを連れて駆け落ちしてきたことに激怒し、様々に意見を述べた。彦六がおみすを自宅に戻すというと、おみすは大いに嘆き、このままここに居させてくれるように懇願した。そして、もしどうしても自宅に戻すということであれば、この世にはもう生き甲斐がないので死ぬしかないと言って、涙ながらに頼み続けた。

(5) おみすを捜す権藤太

権藤太はげんかいを言いくるめたと考えていたが、おみすとまきのすけが駆け落ちしたので落胆した。しかし、諦めきれない権藤太は二人の行方を探索することにし、絶対におみすを手に入れようと思った。そこで様々に思案した結果、日頃親しくしている悪者どもに依頼し、内々に相談して、もしおみすとまきのすけの居所を聞き出せた者には相応の謝礼をすることにした。

【第2回：暴悪のおぼろ夜（6丁裏から10丁表）】

(1) おみすの出産

彦六はおみすの嘆きを思いやり、二人を匿うことにした。一方で、げんかいには知らせておいた。げんかいも娘を不憫に思い、今連れ戻せば若気の一徹で自殺するかもしれないと感じた。そこで、げんかいは彦六に、しばらくの間おみすの世話をしてくれるように依頼し、内々に費用を預けておいた。

おみすが妊娠して十月となり産気づいたので、彦六はげんかいに密かに知らせた。げんかいにも恩愛の情があり、夜に彦六宅へ訪ねて行くと、早くもおみすはまきのすけにそっくりな玉のような男子を易々と産み落とした。

(2) 権藤太のまきのすけ殺害

げんかいはおみすの安産に心も落ち着き、やがて帰宅することにした。だが、げんかいは帰路に夜が更ければ道程に自信がなかった。そこで、彦六とまきのすけの二人はげんかいを送ることにした。帰路の途中でむら雨が降り出した。三人は夕暮れの中を進んでいった。ちょうどその頃、権藤太も外出先からの帰りがけに柳瀬川の辺りで雨に遭い、大木の陰に雨宿りをしていた。すると権藤太は、げんかいが彦六とまきのすけに伴われ帰宅して行くのを見た。提灯を持って先頭を歩く者を見れば、それはまきのすけだった。権藤太は激しい憎さに堪えきれず、また酒機嫌だったこともあり、おもむろに刀を引き抜いてまきのすけに斬りかかった。予期せぬことに、まきのすけは肩先よりしたたかに斬りつけられ、「あっ」と言って柳瀬川に倒れ落ち、流れていった。げんかいは驚いて犯人を見ると、面体を頬被りで隠しているが、その男が権藤太であることを見て取った。と同時に自分の身も危ないと思い、声を立てて人を呼び叫びながら逃げ出した。彦六も慌てうろたえ、ただ「人殺し」と叫び散らし、あちらこちらを駆け回っていたが、そこへ4・5人連れの往来者が通りかかり、「何をしている」と走り寄ってきた。権藤太は見つけられては困ると、往来者の間を潜り抜けて逃げ帰った。

(3) 彦六と火の玉

彦六は、まきのすけが斬り殺されてしまい、大いに悔やんだが、犯人も逃げてしまっただけで済まなく、まずはげんかいを長浜に送り届けた。

彦六が一人で自宅に戻る道すがら考えたのは、もしおみすに、まきのすけが斬り殺されたことをあからさまに語れば、彼女が産婦の血を上げて杳然となることは必死だということである。そこで、彦六は帰宅してもまきのすけが斬り殺されたことを隠すことにした。そして、どのようにおみすをごまかそうかと、その方法だけを考えながら、もとの柳瀬川に至った。彦六が柳瀬川の板橋を渡って行くと、彼が進む方向の2・3間先に火の玉がころころと転がって行く。彼は驚き立ち止まってそれを見た。彦六は、おそらく狐・狸が自分の愁傷につけこみ、火の玉に化けてたぶらかそうとしているのだと思った。だから自分の心が弱くては敵わない。そこで彦六はわざと弱みを見せず、静かに歩いて行った。すると、火の玉も同じ道を先に進んで、転がって行った。その様子はとても怪しげなものであった。

【第3回：遺恨のはる雨（10丁裏～17丁表）】

(1) まきのすけの幽魂とおみす

彦六は火の玉が狐・狸の仕業だと思い、油断せずに進んでいった。やがて自宅の角先まで来て突然、火の玉が彦六より先に家の中へ飛び込んで行った。驚いた彦六は、急いで家の中に入っていった。すると母が迎えてくれ、今しがたまきのすけが戻ってきたことを伝え、そして、どうして彦六がまきのすけより遅れて戻ってきたのかを尋ねた。彦六はこれを訝しく思い、まきのすけが帰ってきたとはとても信じられないと辺りを見れば、家の奥の方から、おみすとまきのすけの話し声がした。それを聞いて彦六は、さては火の玉がまきのすけの執念であることを覺り、思わず涙が流れてきたので、顔を覆った。

彦六は奥の間の様子を覗き見た。するとまきのすけの姿が見え、その表情・格好は何となく哀れげで、おみすと話す声も悲しく涙声のような風情で、とてもこの世の人とは思われなかった。さては、まきのすけは非業の死で浮かばれず、あとに残した妻子に執着の念を残したため、ここにやってきたのであろう。なんとも不憫な有様だと思い、心の中で念仏を称え、両目を擦った。赤くなった目からは涙が止まらなかった。産後の養生を大事にして、早く元気になるがよい。そして小僧には絶えず灸を据えてやってほしい。とにかくそのことが心配だ。何も知らずに可愛や可愛や。よく戻っていただきました。

彦六はあまりにも堪えかねて、涙ながらにまきのすけの側に駆け寄ると、そのまま形は消え失せていった。おみすは驚いて、どうして今まで夫の姿があったのに、どこに行かれたのか、不思議なことだと、うろたえ、うろろうした。彦六は伝えづらかったが、おみすにまきのすけが柳瀬川で狼藉者に斬り殺された次第を語った。それを聞くと、おみすは、「はへ」とばかりに声をあげて泣き悲しみ、狂気のごとくあちらこちらへ身を投げ伏して必死に悲しみを堪えた。彦六の母も勝手より駆け出てきてこれを聞き、ともに悲しみを堪えることができなかった。これほど悲しいことはない。いっそ、死んだほうがましだ。道理で夕べの夢が気にかかった。可哀想に、その子は父知らずになってしまった。

(2) まきのすけを失ったおみすと彦六夫婦

彦六夫婦には二人の男子がいた。兄は彦十で、成長するにつれ気が荒く様々な悪事を働き、大酒を飲み、喧嘩・討論に明け暮れ、あげくの果てに駆け落ちし、今は行方知れずであった。弟のまきのすけは、げんかい方へ奉公に出し、本人も気に入ってしっかりと勤めていた。それゆえ、彦六夫婦はまきのすけだけを老後の頼りとして暮らしてきた。しかし、まきのすけが思いがけず非業の最後を遂げ、彦六夫婦は誠に両手をもぎ取られたような心地がして、声の限り泣き叫んだ。彦六がおみすの様子を見ると、彼女が夫を失った悲しみに堪えかねて死を覚悟し

ているように見えるので、様々に意見した。すなわち、彦六はおみすに、なんとかこの後はまきのすけの追善供養だと思って、残された息子を成人まで育て上げ、父の敵を討ち取らせて、まきのすけの無念の妄執をはらして欲しい、それには何よりも、今は休養をして欲しいと、涙ながらに諫めた。まきのすけが帰らないことをくよくよ思っただけで病気になるのはいけない。とにかく小僧をかたみと思っただけで、早く連れ立って寺参りでもするのがよい。もう泣くな。泣くな。そう言っている俺が、やっぱり涙がとまらない。

(3) 権藤太のげんかい殺害計画

権藤太は成り行きに任せてまきのすけを殺害したが、その時、げんかいが自分の顔を見た様子なので、殺害者が自分であることが発覚するのは必定だと思った。そうであれば後日の妨げになるので、このうえはげんかいも殺害してしまおうと思った。げんかいはおみすと通じて彼女を逃がした。それゆえに今回の関係者に対して遺恨が止まらず、殺害してやりたいのだ。

そこで思い浮かんだのは、毎年げんかいが赴く立山参詣の道中で彼を殺害する計画である。既にこの時期、げんかいには準備を整えようとして立山へ出発している。権藤太はこれ幸いの時期だと思い、急いでげんかいの後を追って出発した。

権藤太は道すがら雲助どもに金子を与え、今このような者が立山参詣を行っているが、この者の帰り来るのをここで待ち受け、殺害してくれるように依頼した。もし雲助たちの手に余れば自分が駆けつけて斬り殺し、決して雲助たちに怪我はさせないと言う。当座の手付けはちよっとしたところでこのくらいである。首尾良く達成した時はしっかりした褒美を出そう。「なににもやらぬ」が聞いて呆れる。いや、これは洒落であるが。

(4) 権藤太のげんかい殺害

げんかいには毎年立山参詣を行っているが、今年もその時節が来たので、下部を二人召し連れ立山参詣に赴いた。立山参詣を終えた帰り道、糸魚川と外波の間の山中で悪者どもが大勢、げんかい一行に喧嘩を仕掛けてきた。悪者どもは下部どもを打ち叩いておっ散らし、げんかいを捕まえて脇道に引き込むと、そこに権藤太が現れた。権藤太がげんかいに言うには、恋敵のまきのすけを殺害した際、げんかいに自分の顔を見られてしまった。そのことが後日の妨げになると思い、げんかいを殺害する目的で彼のあとを追って、ここで待ち受けていた。権藤太はげんかいに、娘・おみすの居場所を白状してくたばれと罵った。これを聞いたげんかいには腹に据えかねて言った。誠におまえは極悪人である。自分には罪がなく遺恨を受ける覚えもないのにこのような場所に連れ込まれたのは誠に災難であり、どうしようもない。必死の状況ではあるが自分一人で死ぬつもりはない。おまえを道連れにと、刀を抜いて討ってかかった。権藤太は思うつぼだと渡り合った。悪者どもは前後左右からげんかいを討ち悩まし、ついに権藤太は難なくげんかいを斬り殺した。

(5) 彦六と茶店の法師・若衆

彦六はまきのすけの横死に力を落とし、悲嘆のあまり出家・遁世も考えたが、人々から諫められて止まった。そこで、せめてまきのすけの菩提のためにと、かねて信仰していた立山に参詣することにし、おみす親子を女房と女中に任せ置いて一人で旅立った。糸魚川の山中で黄昏時となった。草鞋の紐が切れた時、茶店のようなひとつ家があったので立ち寄り、草鞋を履き替えた。家の中から17才ほどの年齢の若衆が茶を酌んで出てきたが、面体・格好はまきのすけによく似ており、彦六は不思議に思いながら見とれていた。すると今度は家の奥より10才ほどの法師が小豆餅を盆に乗せて持ってきて彦六に勧めた。この法師がげんかいによく似ており、彦六はいよいよ不思議に思った。そのうち二人は奥に入ったまま一向に出てこなくなり、彦六は不審な気持ちでここを立ち去り、急いで麓へ下って行った。やれやれ麓へはもう少しだ。精

をつけて行こう。

彦六は考えながら歩いた。あの茶店の法師と若衆はともに亡くなった人々に少しも違わずよく似ていたので、あまりにも不思議に思い見とれていた。家の奥に入ってみたが、昼餉も法師と若衆の姿も見えず、しばらく待っていても家の中に人がなかった。しかたなく心残りではあったがその場所を立ち去ってきた。道すがら彦六が思うに、立山に参詣する人は亡くなった人に会うことがあると聞くが、さては若衆はまきのすけの幽魂だったのだろうか。それにしてもげんかいはこの世にいるのにまきのすけとともに姿を現したことはない。彦六はげんかいは殺されたことを知らないのだから、彼がこの一件を不審に思うことは道理である。

(6) げんかいの死を知る彦六とおみす

彦六は立山を参詣し、まきのすけの痕跡を探しながら帰り道にまた糸魚川の山中を訪れ、先日立ち寄った茶店を訪ねたが一向に見つからなかった。この辺りには全く家がなかった。彦六は不思議に思いよくよく考えてみた。そして、その場所が松の大木がある所と確かに覚えており、そこを訪ねると1本の松の大木はあった。しかし家はなく、旁に石積みで塔が立てられ檜の花が挿してあった。里人に遇ってそのいわれを聞くと、これは以前、60才に近い修験者がここで何者かに斬り殺され、地元の者たちがそのことをいたわしく思っで遺骸をここに埋め、標として塚を造営したのだという。彦六はその修験者の面体・骨格を聞くと、げんかいに違いなく大きく驚いた。さては先に自分がこの場所で対面した二人は、まさしくげんかいとまきのすけの亡魂であろう。げんかいはここで殺されたわけだが、まきのすけの往時の縁が尽きず、今もまきのすけがげんかいに従っている様子を目の当たりに見た。不思議な様子だったと念じつつ、回向して、それより急いで和泉村に帰った。

彦六は帰宅して、このことをおみすに語った。するとおみすはまたまた涙にくれ、さてさてただでさえ夫の横死で悲しんでいるのに、父までもが非業の死を遂げ、いったいこれはどういうことであろうか。いかなる前世の報いであろうか。親に離れ夫に別れ、何を楽しみにしていけばよいのか。生き甲斐のない命であるが、幼い息子がいるので尼にもなれず、よくよくの因果な身であると泣き叫び伏し沈みいたる。そのあとしばらくして、おみすは彦六の話聞いて不思議なことに思いあつた。彦六が自宅を出発した翌日はまきのすけの命日だったので、おみすは小豆餅などを拵え、近隣の人々に配り、まきのすけの供養をして仏に供えた。彦六が糸魚川の山中で茶店の法師と若衆から小豆餅を勧められるとは、いったいなんということだろう。不思議である。彦六はおみすの話聞き涙をはらはらと流し、それと同時にそのことに思い当たることがあった。彦六が自宅を出発のち、まきのすけとげんかいに遇ったのは翌日のことだった。さては中語が何らかの方法で自分の志をまきのすけとげんかいに届けてくれたのだろう。おみすはこれを聞いていよいよ堪えかねて泣き沈んだ。このうちは、自分も立山に参詣し、せめてまきのすけやげんかいの面影でよいから一目見たいと、声も惜しまず嘆いた。おみすは言った。立山(糸魚川の誤りか)ではありがたい御里衆で、まきのすけは浮かんだであろう。彦六が言った。二人の衆の生成りに遇ってきたのでなお悲しい。遇わないほうがよかった。おみすが言う。あなたが羨ましい。どうか私も立山に参詣したい。本当にこの子がいなければ私も早く死んで、父やまきのすけのいる所へ行って一緒にいるものを。それさえできないというのだから因果なことだ。

第4回：恩愛の眞の宿(17丁裏～21丁表)

(1) 彦十

先年、父の彦六に見限られて家出をした倅の彦十は、ますます悪行を積み重ねながら国を遍歴し、この頃は六部の姿になって北国街道を往徊した。里に陣を設けて金銭を奪い取ろうとす

る盗賊になった。越中立山へ参詣する道者を見つけるとたちまち話しかけて道連れとなり、次のように問いかける。「各々方は、亡くなった人々の菩提を弔うために参詣するものと見受けたり。立山の不思議には、信じ次第によって山中で死んだ親にも子にも巡り逢えるありがたいお里（山の誤りか）だということである。あなたがたは、どのような人のために参詣にやって来たのか」。さらにだんだんと問いかけ、親のためと言えば、その親の年配、格好、物に寄せ事にかこつけて聞き澄まし、あるいは、ひとつ子を失い悲しみに堪えかね、せめて罪障消滅のためと言えば、またその子の年頃なり形を問い落とし、そうであれば信心を堅固にして参詣すればよい。その功德で各々方の心にかけている亡者はたちまち極楽成仏する。そのしるしとして、立山の地獄谷というところで目の当たりにその亡者に遇うだろう。このことはすなわち亡者が地獄の呵責を遁れて極楽へ向かい成仏するしるしである。彦十は参詣者たちにこのようなことを語り聞かせ、一緒に道中を進んで行った。

一百三十六地獄は残らずこのお山にある。とてもありがたいところである。そして「血の池もろはく」と言う良い酒がある。私たちのために買って振る舞って欲しい。何事も功德である。

(2) 地蔵の石衛門

彦十と同じ盗賊仲間に地蔵の石衛門と言う者がいた。法師になって麻の衣を着し、立山山中に自分の名前と同じの地蔵堂を建立することを名目に旗を立てていた。小振りな茅葺きの家で鐘を打ち鳴らして参詣者から寄進を請うていた。六部の彦十とかねてから示し合わせており、彦十は道者たちをここに連れてくる。道者たちを石衛門に引き合わせ、志の戒名・俗名を経本に記させ土産を納めさせた。そのうえで道者たちを先に進ませたのち、彦十は石衛門に囁き、今の道者の志の仏の年頃は幾つぐらいで格好はこのようなど、先に聞き済ましておいたとおり話し、あの道者たちが下向してきたとき、その年配に似た幽霊を拵えておいて出してくれるように示し合わせた。俗名は条良美左衛門をたのみます。

(3) 立山の幽霊村

この辺り（立山山中）に、悪者仲間が寄り合い、自分の妻子・親・兄弟などを残らず幽霊に偽装させて地蔵の石衛門の注文に応じて稼ぐ村があった。すなわち石衛門が注文をしてくとたちまちその注文内容に似た者を選び、白装束に髪を乱した幽霊姿に扮装させて道者たちの下向を待ち受け、地獄谷の木陰や岩陰などからちらちらとその体を見せて道者たちを惑わすのであった。そして石衛門法師がその場で道者の気持ちにつけ込み法事と寄進を勧め、金銭を欺しとった。そしてそれを皆で配分した。人々の間では自然にこのような悪者たちが住んでいる村だと噂されるようになり、誰が言うとなく幽霊村と名づけられるようになった。昨日、疱瘡の子供の幽霊に扮装する時、赤い着物を着ると注文されたのには困った。

(4) 地蔵の石衛門宅に居候をする権藤太

権藤太はげんかいを殺害したのち何かしら評判が悪くなり赤松の宿を出奔し、そりより諸処を遍歴した。蓄えていた金子も使い果たし、様々な悪巧みもし、今では身の置き所もなく、少ない知人を頼りに立山の幽霊村にやって来た。地蔵の石衛門法師の家に世話になり、ぶらぶらと遊び暮らしていた。貴様（権藤太）もこれからは俺（石衛門）の弟子になって、少し幽霊に扮して出てみたらどうだ。遊んでいてはつまらないぞ。どうだろう、この辺に男妾の口はないだろうか。

石衛門法師の注文に合った者はすぐに幽霊に扮し、地獄谷・賽の河原・劔の山などの岩陰より道者たちの目に入るように姿を見せた。すると道者たちは哀れ心をおこし、それこそ石衛門の思うつぼとなり、回向料などを掠め取られた。あれあれ私の娘が出た。どうやら死んでから太ったようだ。

【第5回：幽霊の雪の日（21丁裏～25丁表）】

(1) 立山参詣に旅立つおみすと彦六

おみすは彦六から、彼が父・げんかいとまきのすけに遇ったという話しを聞き、しきりに懐かしく思った。おみすはなんとか自分も立山に参詣し、亡くなった二人に会ってその顔を一目でも見たいと思った。もっとも立山は女性の登山が難しいというが、藤橋という辺りまでは行くことができるらしい。そういうことだから、おみすは立山に赴きたいと言う。彦六夫婦はこれを止め、若い女性がなおかつ幼子連れて一人旅するのはたいへん心配だから、良い同伴者が現れるのを待ち、それから行けばよいと言う。しかしおみすは聞き入れない。是非是非一日も早く参詣して親・夫に会いたいとしきりに旅支度をするのでしかたなく、止めても止まらないので、彦六はその心根を思いやった。そして女一人では行かせられないと、彦六はまたまた今度はおみすとともに立山参詣をすることにし、おみすの幼子も連れて早々に出発した。近隣の人々がおみすを見送り、いずれも涙を流してお別れをした。おみすぼう、あばよ。どなたもお達者で。やがてめでたくお目にかかりましょう。おさらば。おさらば。妻を一人残して行くのが気にかかる。なんまいだ。なんまいだ。

(2) おみすと彦六の夢に現れたげんかい

おみすと彦六は、その日は糸魚川の宿に宿泊した。夜更けに二人の夢の中に石を積み重ねた塔のようなものが枕元に現れ、たちまちその後ろから人の声がした。私はげんかいである。立山からの帰路、この山中で権藤太によって殺害された。地元の者たちが私の遺骸を埋め、標に石を積んで造営してくれた。先だって彦六が立山に参詣した節、これ幸いと私がまきのすけに言い合わせておいて、ここでおまえが私を見つけて、まきのすけと二人でおまえに対面したのも、私がこの世にいないことを知らせるためであった。この度おみすがこの地に来たことは幸いである。我々の敵である権藤太はこのほど立山に来ている。幽霊村と言うところにいる。何とかしておまえたちで敵を討ち、私たちの無念の妄執をはらしてもらいたい、と言うかと思えばそのことだけ耳に残って、夢はあえなく覚めてしまった。アー良い酒だ。もう一つ重ねましょう。アー、ウー、ムニヤ、ムニヤ、ムニヤ。

(3) 彦十との再会

彦六とおみすは不思議な夢のお告げで、げんかいの殺害は権藤太の仕業であることを知った。そして今、幸いにもその権藤太は立山の幽霊村というところに忍び居るといふ。何とか手立てをして権藤太を討ち取りたいと先を急いだ。その道すがら船見と言うところの山中で、彦六は茶店に忘れ物をしたことを距離にして一・二丁も過ぎてから気づき、急いで取りに戻った。その間、おみすは息子に乳を飲ませながら待ち合わせていた。するとそこへ六部一人が通りかかった。おみすが一人で見ているのを見て周りを見たが、彼女の前後に人はいなかった。六部はおみすに話しかけて側に近づいて行くが、おみすの首に掛かった財布の紐を見つけ、旅費のお金を奪い取ろうと襲いかかった。おみすは悲しげに様々に詫言するが六部は承知しない。無理矢理旅費の金子を奪い取った。イヤ、こいつはまんざらでもない。しかし、がきを連れているから亭主と道行きだな。いやらしいやつらだ。旅費は私が持っていません。そこを話してください。そこへ彦六が馳せ戻り、狼藉者めと引き除けようとしたとき、六部が着けていた笠の紐が解けて落ち、互いに顔を見合わせれば、歳をとっても見忘れ難き親子の縁、その六部は先年家出をした彦六の倅の彦十であった。イヤ、もう謝り入りました。こんなにへこんだことは一生の間に覚えがありません。おのれは、おのれは。エエ、どうしてくれよう。腹が立つ。不孝なやつだからこそ不憫で涙がこぼれるが、悔しいわい。六部が地に伏して謝る姿を見て彦六は涙ながらに言った。おまえは我が家を出奔してこの方、悪党がやめられない。六部と偽ってのその姿は重ね重ね不届きである。どうしようもないやつであるが、しかしこの度は助けることにしよう。

う。そのかわりに立山まで召し連れて行くことにすると行って、様々に叱った。彦六は敵の権藤太を討ち取ろうと心は逸るが、若い女と足手まといの幼児をかかえ自分自身も老人である。血気の権藤太に出会ったとしても、もし返り討ちに遭えばこのうえなく残念である。だがここで倅・彦十に巡り逢ったことこそ幸い。彦六は今の彦十の罪を許し、このまま召し連れて行って、まさかの際の戦力にすることとした。彦六は彦十にこれまでの経緯や警討ちの計画を説明すると彦十はそれを聞いて簡単に実行できると言う。

【第6回 孝心の月あかり（25丁裏～30丁裏）】

(1) 偽幽霊に拵えられた権藤太

すなわち彦十が言うには、おみすや彦六に権藤太を討たせるために、まず彼が幽霊村を探索し、権藤太の年頃や面体、格好を詳しく聞き出す。次にその情報をもとに立山山中にいるあの石衛門法師にこのような注文によく似た幽霊を用意してくれと、権藤太の面体や年頃をそのままに話す。さらに加えて石衛門には、施主となる道者がかなりの大金を所持しているようなので、この幽霊でうまく道者を欺くことができれば相応の金儲けになりそうなことも伝えると言うのである。計画に従って彦十は石衛門法師のところに赴き、注文によく合った者を探し出して幽霊に拵え、出してくれるように約束してきた。その後、彦十は彦六とおみすに追いつき、二人にもうじき本望を遂げることができようであろうが、立山からの下向のとき地獄谷に意識を置いて欲しいと言う。やがて三人が地獄谷に至ると、彦六は、必ず帰りにはこの岩陰より敵の権藤太が現れると語った。

石衛門法師は六部の注文を受け、何が何でも金儲けをしてやろうと幽霊どもが集まり居る所へ駆けて行った。歳頃は三十二・三のおとと、痩せ形で眼が大きく頬骨が出た幽霊が必要である。貴様がどうやら似てはいるが鼻がひしゃげているので地獄で瘡をかいたと言うわけにもいくまい。あちらの男は頬骨の出ているところはよいが耳の際にたんこぶがぶら下がっているから始まらない。はて、誰がよいだろう彼がよいだろうといろいろ相談するが一向に似た者がいない。石衛門はしばらく考えていたが、いや、いるぞいるぞ、自分の家の居候がこの注文とちっとも違ってない。石衛門法師はこれは奇妙だと思いながら、やがて権藤太に頼み、幽霊を拵えた。

(2) 権藤太を討ち取り警討ちを果たしたおみす

権藤太は自分の面体や格好そのままに注文を受けたが特に不審に思うわけでもなく、世話になっている石衛門の指図に疑うことなく、白い一重物を着て地獄谷にいた。権藤太は六部の合図を待っていると、六部はやがて人々を伴い下向して地獄谷にやって来た。六部がそれと合図をすると、権藤太は笠を被ったおみすに気づかず岩陰より現れ出た。すると彦六は素速く後ろに回り、権藤太の首筋を掴んで各々方の敵と言うのはこの男かと言う。おみすは一目見ていかにもその者こそ、しらふじ権藤太だ。父の敵、夫の讐、思い知るがいいと、懐に用意していた短刀を抜き離して向かっていった。こいつはとんだ目に遇わせる。本当の幽霊であれば消えてしまうところだが、素人の幽霊だけにどうにもならない。

このとき彦十は権藤太をひっ掴んで投げ落とし、おみすに敵を討たせてやろうと加勢した。そこへ同じ幽霊村の仲間の者たちがこの様子を見ると、そりゃ喧嘩だ。幽霊仲間には引けを取るなどおおいに馳せ集まり、人々を取り巻き権藤太に力をかけた。彦十は怒って錫杖を掴み、多勢の中を駆け回り叩きつけていくと、幽霊どもは散々に打ち倒れ、中には傷を被る者もいた。おのれら、一人も残さず討ち殺して本当の幽霊にしてやろう。どっこい、そうはいかない。辟易するな。本当の幽霊とは違って大飯を食う男だ。それも三度ずつ魚を付けてたいへらくじゃない。嘘と思うなら俺の家に来て見ろ。俺は先に行く。オヤ、オヤ、六部さん、そこを放して（そこはなし）くださいとは、悪い洒落だぞ。どっこい、しめた。いや絞められた。あいた。

あいた。親分、じわっと頼みます。ア一、痛い痛い。おいらがこんなに斬られたのをかか衆が見たらさぞ泣くであろう。それが不憫だ。そりより俺はもう助からないだろう。俺が死ぬ分はいとわないが、かかあを後家にするのが可愛そうだ。かかあも直に他の亭主を持つような心だとは心配していないが、大方、後家のままでいると思うとそれが不憫だ。可愛い。可愛い。

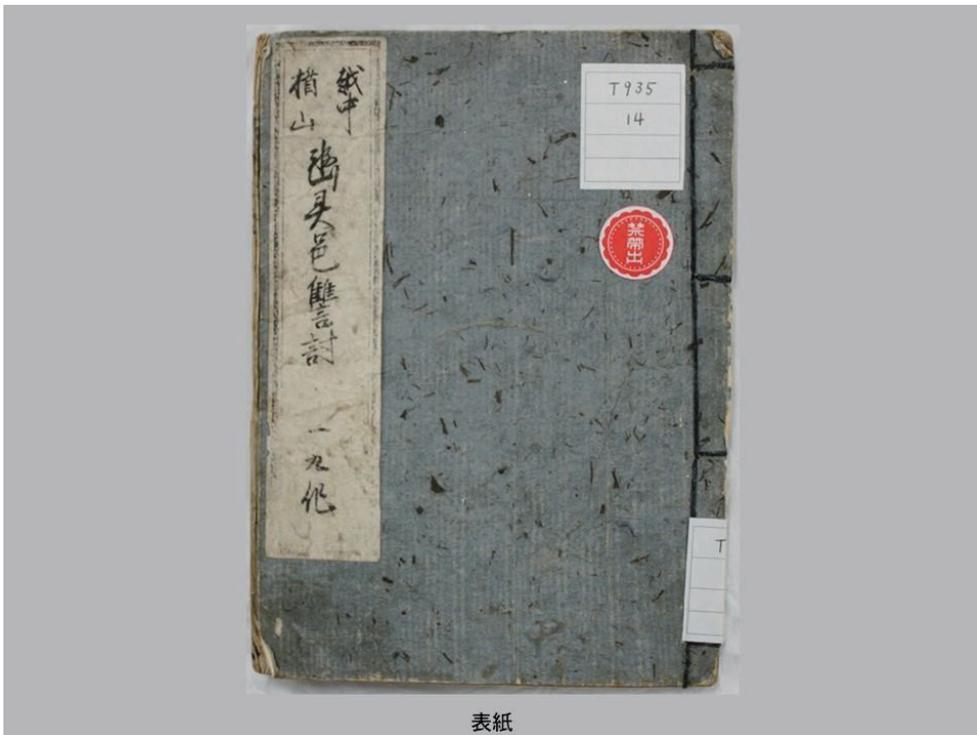
権藤太は思いがけずおみすに出遭い、まったくの丸腰で刃物も持たず、抜けつ潜りつ逃げ回るうち、彦十が幽霊どもをおっ散らし駆け寄って権藤太を錫杖で叩き伏せた。そこへおみすが飛びかかり、女ながらも親と夫を思う一念力で、岩でも通す切っ先を鋭く突き通され、権藤太は七転八倒して悶え苦しみながら死んでいった。思い知ったか。思い知ったか。嬉しや、しとめたそうな。よいきみ。よいきみ。

(3) 目代からの褒美とまき三郎の家督相続

地元の目代より詳しく質疑が行われ、おみすと彦六にご褒美が下された。まさにおみすの孝心貞節を天道も憐れんでくださった。また立山の御利益があつてか、さすがに手強い権藤太を思い通り討ち取り、本望を達成した。また、おみすの主人は彦六の倅・まきのすけであったが、彼が亡くなったことでおみすは困窮した。それに対しておみすは目代から、これまで気の毒で遭ったと、御褒美のお言葉を頂戴し、面目を立てた。今回の一件で幽霊村の悪者たちもみな追い払われた。まことに立山は日本一箇の霊場であり、天寿不思議の霊応もあるのだろうが、死者がこの山にいるわけではなさそうである。ただ、げんかいとまきのすけが彦六に遭いに出てきた現象は、まさしく、まさしく、二人が亡霊として現れたものであって、そのことでおみすらが互いに武勇をおこし、自然とその気が合蘊して不思議なるかな讐討ちを成立させたのである。さてさて、女にしては希なる働きとのこと、立派だ立派だ。そのくせ、めんかもよいである。エヘン、エヘン。おみすは故郷へ帰り、ご褒美の金子で田畑を買い求め、一子・まき三郎を家督とし、彦十と彦六はその後見として、安楽に暮らした。孝心の徳、めでたし、めでたし。千穂万歳、大々叶。これから、坊やおとなしくしなければなりませんよ。おめでとうございます。

おわりに

さて今回本稿においては論文の分量制限もあるので、まずは史料紹介として『越中楯山幽霊邑讐討』の翻刻・翻訳（意識）のみを行った。本格的な内容分析を終え、立山信仰史研究の分野における同書の史料的位置づけについても既に執筆を終えているが、それについては稿を改めたい。

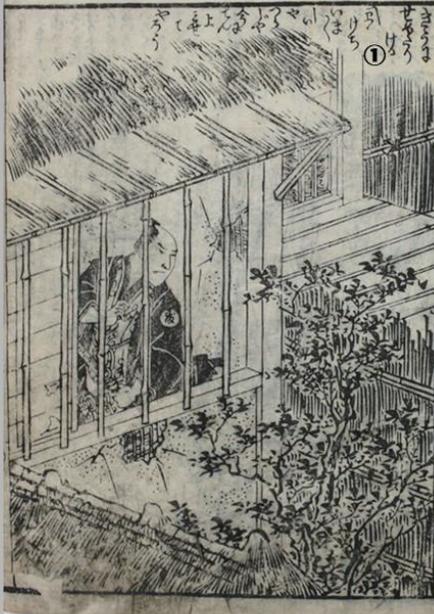


表紙



1丁表

表紙裏



4丁表



3丁裏



5丁表



4丁裏



6丁表



5丁裏



7丁表



6丁裏





16丁表



15丁裏



17丁表



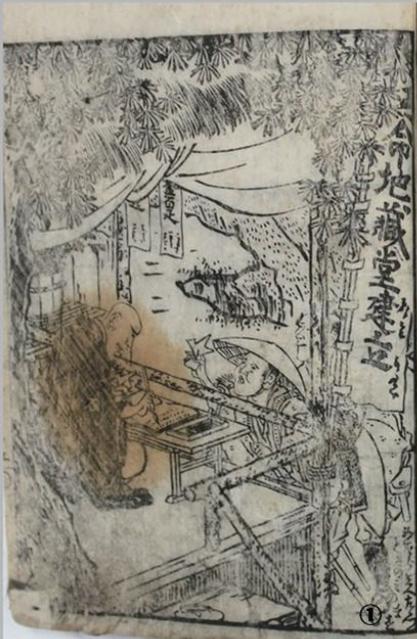
16丁裏



18丁表



17丁裏



19丁表



18丁裏



22T表

21T裏



23T表

22T裏



24丁表

23丁裏



25丁表

24丁裏



28T表



27T裏



29T表



28T裏

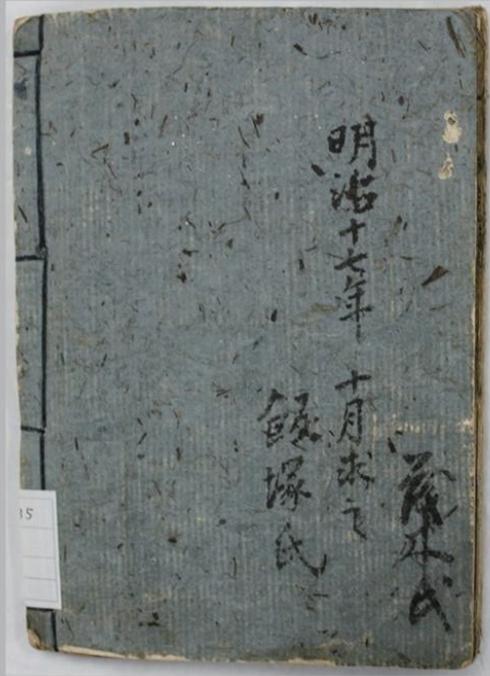


30丁表

29丁裏



30丁裏



裏表紙